

ようこそ畑へ

2009年9月14日(月)、9月17日(木) VOL.13

9月に入り、どんどん日が短くなってきました。午後6時前には、夕日が沈んでいきます。最近、夕焼けはきれいな日が多く、夕方に空を見上げるのが日課になっています。

日が沈むと、急にひんやりとして、どんどん暗くなっていきます。ついこの間までは、7時を過ぎても明るかったような気がするのですが、どんどん秋は進んでいきます。

じゃがいも、かぼちゃなどの収穫が始まっています。来年に向けて種採りも始まっています。先週は、トマト、小松菜、ルッコラの種を採りました。

小松菜は昨年に続いて2回目の種採りです。種を採るには、収穫期を迎えた小松菜の一部をそのまま畑に残して花を咲かせます。小松菜は種まきから50日から60日ぐらいで収穫に至りますが、種を採るためには、更に2カ月以上畑に残しておく必要があります。つまり、畑のその部分からは収穫はせず、したがって収入もない、ということになります。種は採らずに全部収穫してしまえば、そこにまた種をまいて野菜を育てることができますので、その方が効率的です。

野菜の種を採るということは、野菜の一生に最後までつきあうということであり、命のつながり、そのものです。野菜を作っていく上で大切な種を採ることで、農業は命をつなげていく仕事であることを、深く肝に銘じていきたいと思います。

【固定種と交配種の話】(つづき)

効率的に交配種を生み出す方法は、年々研究が重ねられています。

現在広く行われている方法は「雄性不稔株（ゆうせいふねんかぶ）」を利用する方法です。「雄性不稔株」とは花粉が出ない株ということです。野菜は花粉が雌しべについて受粉して種ができるのが通常ですが、ごく稀に花粉を出さない個体があるのだそうです。その個体は自分の子供を残せないわけですから、自然の営みの中では淘汰されていくものです。しかし、この個体を見つけて増殖して、交配種づくりに利用する方法が確立されてきました。

「雄性不稔株」は自身は花粉を持ちませんが、他の個体の株から花粉をもらえば種を作ることができます。ただし、その種は「雄性不稔」になります。つまり、「雄性不稔」の子もまた「雄性不稔」になるのです。こうして、「雄性不稔株」を増殖して、他の品種の花粉を付ければ効率的に交配種ができます。ただし、その過程で「雄性不稔」の性質が引き継がれず花粉を作ってしまう株も出てきますが、そのような株は全部つぶしていきます。花粉を出す正常な株はつぶして、花粉の出ない株だけを残していくというのは自然の営みとは逆の方向に行っているように感じます。

この花粉の出ない「雄性不稔株」を増殖して交配種作りに利用する方法は、アメリカで始められ、タマネギ、トウモロコシ、ニンジン、ビートなどで実用化されていきます。日本でも、ネギから始まって、ダイコン、ハクサイ、キャベツなどのアブラナ科の野菜にも広がっています。今、私たちが食べる野菜は、この花粉を出せない「雄性不稔株」の子孫ばかりになりつつあります。

そして、アブラナ科の交配種づくりにおいても、自然の営みとは違う方法で交配種が作られています。それは二酸化炭素を使う方法です。（つづく）

伊達家の食卓

【枝豆】自家採種5年

伊達家では、黒豆、青大豆、大豆を枝豆をお届けします。昨年より10日ほど遅れていますが、まずは黒豆の枝豆をお届けします。